

アルコール依存症者との思い出

岩見沢市医師会
空知病院

中村 和芳

長年アルコール依存症（以下ア症）の治療に取り組んでいます。ア症者との思い出の一端を書かせていただきます。

昭和55年に産婦人科から新たに精神科を志し、札幌医科大学神経精神科に入局させていただきました。今までとは随分勝手が違い、戸惑う毎日でした。

翌年、浦河日赤病院への出張を命ぜられました。当時の精神科部長はアルコール医療のエキスパートで、日高地域の断酒会育成にも力を入れておりました。私も必然的にア症者と関わらざるを得なくなりました。10名ほどのア症者が入院していましたが、一癖も二癖もあるような年季の入ったモサ連中ばかりで、不気味さと恐怖感を抱いてしまいました。入院してくる患者は振戦せん妄に移行する 경우가多く、中には作業せん妄（漁師が多く、保護室内で汗まみれになって綱の修理をしている）を呈する者もいました。反抗したり、威嚇してきたりと毎日がヒヤヒヤものでしたが、中には面白い患者もいました。

ある晩、病院の当直をしていた時のことです。私が急患室で患者を診ていた時に、白衣を着たヒゲ面の“医者”がやって来て「ちゃんと診ないとダメだよ」と言ってサッといなくなりました。私と看護師はびっくり新任の先生か…とと思ってしまいました。よく考えるとそんな話は聞いていませんでした。後日判明したのですが、その怪しげな先生は男性看護師の更衣室に侵入し、白衣を盗んで病院中を徘徊していた“アル中様”だったのです。私は怒る気にもなれず、ただ笑うしかありませんでした。その後、変なご縁でそのアル中様としばらくお付き合いするハメになってしまいました。今でも忘れられない患者の1人です。

当時は病気というより「どうして飲み続けるのだろうか」という思いで関わっていましたので、取り調べのごとく飲んだ理由を聞き出すことに躍起になったり、断酒の必要性をヒステリックに説いたり…と医者の権威をフルに発揮しながら非常に“熱く”なっていました。そんな私を見てか、部長から「断酒会に行ってみないか」と誘われました。当時日高には4つの断酒会があり、それぞれ月2回ずつ例会が開かれており、部長とPSWが毎回入院中のア症者を連れて出席していました。部長命令には逆らえず、しぶしぶ出席することにしました。ところが2時間座っているのが苦痛で、とにかく早く終わってほしいと願うばかりでした。最後に感想を求められ、「大

変ためになりました」などと心にもないことを言って、そそくさと帰ってきました。そんな訳であり良い印象は持ちませんでした。立场上仕方なく出席し続けました。飲んで迷惑をかけていた話を聞かされる度に腹立たしくなり、現在は飲んでいないと言われても信じられませんでした。とにかく出席した日はストレスが増大し、帰宅後は飲酒会になってしまいました。

この時期、国立久里浜病院でのアルコール臨床医研修にも参加し、有名な先生方から講義を受けたり、治療プログラムを見学してきましたがまだピンと来ず、ア症者の“心”がなかなか理解できずにいました。

1年後、大学に戻りましたが、ア症者の集団療法（週1回）を担当することになり、かなりビビってしまいました。退院後からAA（自助グループ）に通っているア症者が大半（少数の薬物依存症者もいました）で、彼らの話し上手には感心するやら驚くやらで、口下手な私は最後にまとめの話をするのが苦痛でたまりませんでした。彼らが体験談を話している最中にも、今日はどのようにまとめるか…ということばかりを考えていたので、彼らの話なんか全く耳に入りませんでした。そんな訳で集団療法のある日は朝から気が重く、憂うつでした。それでも彼らに支えられながら、どうにか続けていきました。

そのうち、少しずつ雰囲気にも慣れ、多少余裕も出てきてまとめの話も何とかできるようになりました。彼らの話も落ち着いて聞けるようになり、「酒は悪くはなかったんだ、俺たちの生き方に問題があったんだ」と繰り返し語っていることに気づき、非常に心が動かされるようになりました。次第にこの病気の根底には、医療だけではカバーできない、アルコールを超えた人間としてのさまざまな問題が潜んでいることを思い知らされました。私自身の中にも彼らと共通した問題があるように思えてきて、ア症者が非常に身近な存在になりました。回復には、仲間の存在が必要なことも納得できるようになりました。集団療法を担当したおかげで徐々に肩の荷が下り、気持ちも楽になって「“アル中”中毒」から解放されていきました。

昭和58年からはアルコール治療に力を入れていた旭山病院にお世話になり、2年間は専門病棟医として働かせていただきました。

昭和62年から現在の病院に勤務しており、ア症者と関わり続けています。